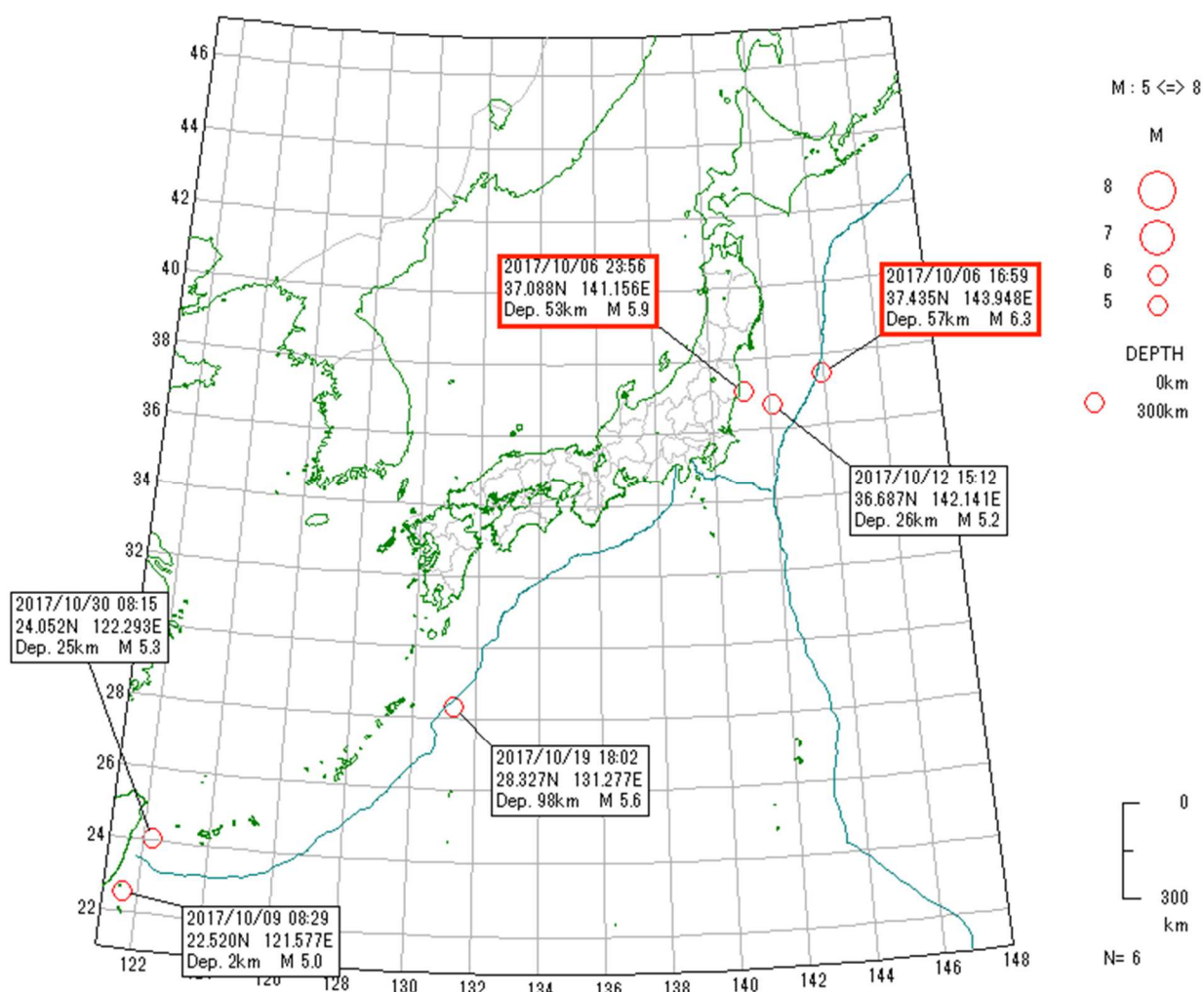


**2017年10月の地震活動概観**

10月に日本列島およびその周辺で発生した地震のうち、図中の範囲でマグニチュード 5 を超える地震は 6 個発生しました。9月は10個、8月は7個、7月は11個、6月は6個と推移しており、特に地震活動が活発であったという事はありません。ただ10月6日に2つの地震(M6.3とM5.9)が福島沖のすぐ近くと日本海溝の外側(アウターライズ)で発生した事は、米国地質調査所の速報でも東日本大震災の影響が強く感じられたペアとなる余震活動として、大きく取り上げられました(図中の赤枠で囲った地震)。これは地震学的に将来もう少し大きな地震活動がこの2つの地域で発生すると考えられているからです。この10月6日の地震は10月に日本周辺で発生した最大の地震でした(マグニチュード6.3)。

2017 10/1 0:0 -- 2017 10/31 23:59

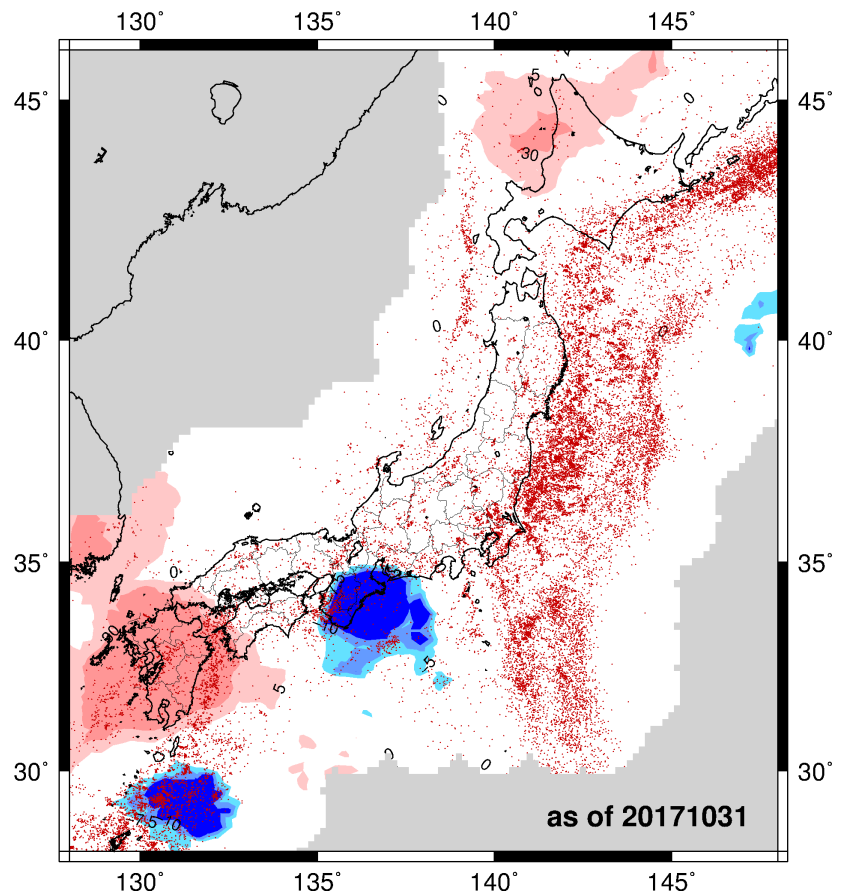
**海域の M7クラスの地震をターゲットとした地下天気図®解析**

9月25日付のニュースレターに続き、海域の長期間(2000年以降の17年間)の地震データを用いた地下天気図解析です。DuMAでは地下天気図の作成に我々オリジナルの計算アルゴリズムを適用して解析を行っています。現在のアルゴリズムは、異常の見逃を少なくするために、異状検出感度を高めています。そのため時には“偽の異常”を検出してしまう可能性が存在します。



この弊害を改善するために、別のアルゴリズムを今回は併用して解析を行ってみました。

その結果、新しく適用した計算アルゴリズムでは、紀伊半島沖の異常は従来考えていたより、それほど大きくない可能性が出てきました。右の図は従来使ってきたアルゴリズムによる地下天気図です。10月末の時点でも紀伊半島沖に大きな地震活動静穏化の異常が存在している事がわかります。



次に右側にお示しする地下天気図が今回始めて紹介する計算アルゴリズムで、静穏化の検出能力に少し違いがあるものです（どちらかと言えば、より静穏化検出に慎重なアルゴリズム）。

このアルゴリズムでは紀伊半島沖の異常は残るものの、それほど大きな異常ではない事がわかりました。

それに対し、九州南方の南西諸島沖の異常はいずれの計算アルゴリズムでも強い地震活動の静穏化異常が認められます。紀伊半島沖より、より確度の高い異常でこちらのほうが重要な異常と判断しています。

